

はじめに

ABCCの歴史が編纂されるに当り、私にも資料を提出せよとのことで探してみたが、皆、無秩序で杜撰なものばかりなので、その中から必要な真を抜萃することとした。

1. サイン帳 (1)
2. サイン帳 (2)
3. Five Year Diary (1950年1月1日 - 1953年7月2日)
4. アメリカ紀行日記 (1955年2月14日 - 同年4月9日)
5. 1969年の日記帳
6. 長崎原爆被災誌、第4巻
7. Round Table Discussion (1950)
8. Medical Survey of Atomic Bomb Casualties (R. Shirahata, 1953)
9. 長崎医学同窓会 会員名簿
10. 放射線研長崎支所、林田事務次長談話
11. 私の記憶
12. 世界一周の旅 (1, 2)

私の知っていることは殆んど長崎ABCCの事ばかりで、その中でも所長 のことが主である。尚、私と原爆との関係や被爆直後の状況も明記する必要があるので、それを初めに略記することとした。

長崎 ABCC が発足するまで

1945年(昭和20年)8月9日は原子爆弾が長崎市松山町の上空で炸裂し、当時長崎医科大学の付属病院長だった内藤勝利教授が爆死したので、私はその後任として同年8月9日付で付属病院長に任命された。退任したのはそれから3年5ヵ月後の1948年12月28日である。

旧長崎医科大学は原爆によって基礎教室も付属病院も

すべて灰燼に帰し、医科大学としての機能を全く喪失したため、1945年9月24日から当時の大村海軍病院（現、国立長崎中央病院）に寄寓することとなり、急性放射能症で病臥にいた私も、翌々日の9月26日に同病院に移った。そのころ、海軍病院にはアメリカの医学者や軍医の人達が、原爆被害の調査研究のために寄宿しておられたが、私が9月26日に会ったのは次の人達であった。

Dr. Henry L. Barnett (団長), Dr. Joe W. Howland, Ph.D,
Dr. H. O. Whipple, Dr. B. M. Brandage.

以上の人達は10月5日に海軍病院を去って帰国されたが、その後継の研究者は9月下旬に病院にまゐられた次の人達であった。

Dr. Elbert De Coursey (団長), Prof. Shields Warren,
Dr. Harold Schwartz, Dr. Samuel Berg,
Dr. Robert H. Elbert, Dr. Herman Tanower,
Dr. Thornton Tayloe Perry, Dr. George V. Le Roy
この人達は長期間滞在して、大村海軍病院と長崎新興善小學校（臨時救護病院）に別れて、研究や調査に従事しておられた。

以上の外に東大医学部からも都築教授を団長とする研究団があり、長崎では生残りの教授、助教授、助手、学生達が病院に寄住しながら大学の再建のために働いていた。私は学生を指揮して8000余人の被爆者を調査した。

長崎医大の総員はアメリカ進駐軍の命令により、1946年5月1日に大村海軍病院から佐世保海軍病院諫早分院に移転し、1947年には浦上の長崎医科大学外來本館を改装して基礎教室が復帰し、1949年には臨床各科が諫早及び新興善から浦上に復帰した。その後諫早病院は、長崎大学医学部付属

病院を東急病院となり、1963年3月31日まで存続した（長崎
医学同窓会、会員名簿による）。

長崎ABCCの所長について

長崎にABCCが設置されたのは、「長崎原爆被災誌、第4巻」によると、1948年（昭和23年）7月で、初めは長崎保健所の一部を借りて活動を開始した。

第1代所長 は Oregon州のPortlandから来られた Mrs. Elizabeth J. Creighton (Public Health Nurse) で、私は大学の付属病院長だったので、教人の者と一緒に彼女の宿舎で行われたパーティーに招待されたことがある。その時私は風邪気味で、咽が乾いたので水をお願いしたところ、waterの発音がなかなか通じないで困ったが、何べんか「ウォーター」を繰返したらやっと通じて「オー、ワラー」と笑いながら水をフップで戴いたことを憶えている。色の白い、太った綺麗な30才余りの女性だったように記憶している。いつまで居られたかは、記録がないので不明である。

第2代所長 は Dr. Robert K. Kurata だったが、何年頃に Mrs. Creighton と交替されたかは不明である。しかし私の日記 (Five Year Diary) によると、Dr. Kurata が長崎を去られたのは、1950年2月8日であるから、長崎にABCCが開設されてからそれまでの1年7ヵ月の間に2人の所長が勤務したことになる。1948年及1949年の日記がないので確言は出来ないが、Dr. Kurata の勤務期間は1年ぐらいではなかったかと想像する。

私が1955年にアメリカを14) 遊した時は Los Angeles に住んで居られ、4月5日に奥野から日本字のサイン（倉田吉太郎、倉田操）を戴いたのがサイン帳(2)に戴っている。

第3代所長 は Dr. James N. Yamazaki で、1950年2月6日に Dr. Kurata と一緒に私とDr. 斎藤に交替の挨拶に来られたことが Five Year Diary に記されている。

Dr. Yamazaki の所長時代には 私との間に色々の事業が行われた。

(1) 1950年6月7日に Dr. S. T. Kimura (眼科医), Dr. W. J. Schull (遺伝学者), Dr. S. Takeshima (通訳) を連れて大学に来た (浦上の本院だったか、新豊善臨時病院だったか不詳)、原爆座談会 (Round Table Discussion) を行った。私が司会者となり、被爆生存者13名 (医師、看護婦、その他) を集め、影浦、広瀬、和泉の3教授も出席した。

この内容は英文で発表されたが、どの雑誌に発表されたか、憶えない。手紙に別刷があるだけである。

(2) 私は1945年10月から12月までの間に、生残りの医局員及び学生と一緒に被爆者8000人余りの調査を行い、これを整理して

「長崎における原子爆弾傷害の統計的觀察」

第1編 被爆者の死亡率

第2編 受傷者の死亡時期

第3編 外科的損傷

第4編 被爆者の放射線病

という論文を書いたが、未発表のまま放置されていたので、これを Dr.

William S. Adams, Stanley W. Wright, James N. Yamazaki, の3人で要約して、1953年の Military Surgeon に私らが発表して頂いた (Medical Survey of Atomic Bomb Casualties, by R. Shirabe)

(3) 私が1945年に学生達と調査した調査票は5000枚余りあって、それを課早が勝手に保管していたが、ところどころ鼠に食われて破壊したので、Dr. Yamazaki にお願いして ABCC で保管し貰うことになり、1951年5月28日にジーンで課早から長崎に運んでいただいた。

彼の送別会は同年5月21日に催され、大学からは頼尊、北村、林、調らが出席したが、長崎を去られたのは5月30日であった。私が

アメリカを巡遊した1955年には Los Angeles で小児科を開業中で、大妻御厄介になった。ところが今年(1984年)5月5日に突然大妻お揃いで長崎に来られ、29年振りに再会するところに来た。

○ 第4代所長 は Dr. Stanley W. Wright で、夫人の Dr. Phyllis Wright も長崎に来ておられたが、ABCCの所員であつたかどうかは憶えていない。Dr. Wright は昔から Dr. Yamazaki と一緒に ABCC に居られたようだが、所長になられたのは Dr. Yamazaki が長崎を去られた後だつたと思う。Dr. Wright の所長の時に私の娘、朝子(choko)を ABCC の統計部に採用していただいた(1952年春)。

Dr. Wright は 1952年4月25日に Mr. Noble を連れ、大学に来られ、私の被爆距離や遮閉状況などを精密に測定して、私の被爆線量を 50 rad (多分そうだったと記憶する)と想定された。その話を私が 1955年に Washington D.C. の Atomic Energy Commission を訪れた時、Dr. John C. Baughner や Dr. Charles L. Dunham は当時の症状を聞きながら「50 rad は少い。100 rad はあつたろ」と云われたことを憶えている。

Dr. Wright からは、ABCC の図書や医学雑誌、stereoscope などを貸していただき、大変親切にしていただいた。又8月9日の慰霊祭の日には大学の慰霊碑にお花を保えしていただいたこともある。

彼が長崎を去られたのは、1952年9月7日であつた。所長勤務は1年4ヵ月と云うことになる。夫妻はヨーロッパを廻って帰米され、1955年12月 UCLA に勤務中に Los でお会いしたが、まだお若いのに病気で亡くなられたと云うので、意外に思っている。

第5代所長 は Dr. Frank H. Connell と云つていたが、Dr. Wright の退任と Dr. Connell の就任との間に2ヵ月間の空白があり (Dr. Connell の就任は1952年11月6日)、その間に Dr. Richard C. Scott のサインが私のサイン帳にあるので、

或いは Dr. Scott が 所長代行 みたいな職についていたのではないかと
思う。それが事実とすれば、Dr. Scott は 第5代 所長で、Dr. Connell
は 第6代 所長と云わねばならない。

Dr. Scott が 長崎に居られた頃、私は 特別に 親交がなかったとみえ
て、彼の名は 日記に出て来ないが、私が 予力各地を 巡歴した時、彼は
Rochester N.Y. の大学に居て、私は わざわざ 彼を訪ね、Rochester N.Y.
に一時泊して、翌日 彼の紹介で Dr. Earle B. Mahoney の 心臓手術を
見せて貰ったことを憶えている。だから 長崎でも 或る程度の 交際が あった
ものと思われる。

Dr. Connell とは 不思議な縁で、長い間 親交を 続けた いる。
私の 日記 (Five Year Diary) は 1950 年から 1953 年の 半ばまでしか
書かれて いないが、その間に 彼のことは 次のように 記されている。

1953年 3月6日 に 広島 ABCC の annual meeting が あり、私も 出席
して 40イドの 報告をしたが、その時 彼から スライドを作ったことを
憶えている。3月19日には 長崎の ABCC で 懇親会の 例会が 催され、大学からは
9人の 教授が 出席した。Connell 夫人も 同席されたように 書かれて いる
ので、或いは 親睦パーティーの 様な 会であったかも知れない。この様な
ことは 初めて だったのだ。恐らく Dr. Connell の 案集で、ABCC と 大学との
関係を 緊密にしよう と 試み だった とも 思われる。

その後 4月17日に ABCC を 訪れた時に、彼から ABCC の 将来について
いろいろ 諮問されたので、医学部長に ほか、4月23日に「ABCC
の 在り方」についての 教授座談会を 催し、30日には ABCC の 所謂 sub-
committee にも 出席した。

その後は Five Year Diary に 大した 記事がなく、ただ 7月1日に
ABCC に 行って Dr. Connell と Dr. Waden に 会い、患者 診察の ことを
相談したことが、あとは 日記が 書かれて いない。

Dr. Connell が いつ 長崎を 去られたかについては、確かな 記録が
ないので 不明であるが、資料 第4の 日記によると、1954年 10月11日付

の手紙を Washington D.C. から戴いたこと、又、同年6月に ABCC で彼が、私を Leaders Program に推薦すると云ったことが書かれているので、1954年6月には彼は長崎に居られ、同年10月には Washington に居られたことが確実だから、彼は 1954年7月から9月までの間に長崎を去ってアメリカに帰られたことになるのである。彼から手紙を戴いた後、長崎のアメリカ文化センターの館長 Mr. Berlin の来訪や、新聞記者のインタビュー等があり、11月26日に知事、市長、大学長、医学部長、ABCC の Dr. James K. Scott 等の臨席の下に Mr. Berlin から Invitation の書類を戴き、Leaders Program の1員に採用されたことが確定したのである。お陰で私は 1955年2月から5月までの3ヵ月間、アメリカ各地を歴訪して大学、大病院等を視察に廻ったが、同様に Dr. Connell の推薦で Leaders Program に採用された 朝長正允君も同じ頃に渡米して、彼とは Boston で出会ったことが出来た。

Dr. Connell はアメリカに帰国後、China Medical Board の副所長をされた。Houston の Post graduate Med. School に勤務されたようであるが、私がアメリカを訪れた時は Washington D.C. の 2716 38th St NW に住んでおられた。China Med Board (C.M.B.) に居られた頃は 1年おきに (1961, '63, '65, '67) 日本、中国、東南アジア等を訪問され、その都度 私の家に寄られたので、医学部の幹部や Dr. の知人から 7-8人 私の家に集って歓迎会を催すのを例とした。

① 1961年9月8日 — 北村精一学長夫妻、中込与四郎医学部長夫妻、ABCC 永井勇氏。

田崎通治(後に私の養子となる、1958年から米国アメリカ寄居)、調夫婦

② 1963年4月13-15日 — 和泉院之学長、後原敬郎医学部長、中込教授夫妻、永井勇氏、辻田教授。

岸野滋助教授、五治、調夫婦。

4月15日 — 田崎通治参聘式、茂木ビチオデル歓迎会。

③ 1965年5月7日 — 後原教授、小池教授、辻田教授、岸野教授、五治、調夫婦

④ 1967年7月5日 — 三谷教授、小池教授、朝長教授、辻田教授、永井勇氏、五治、調夫婦

1963年には C.M.B. から長崎大学医学部に図書館を寄贈して頂いた
ので、私の家での歓迎会ばかりではなく、図書館寄贈式の日(4月15日)には
教授全員が 新本のヒーチホテルの庭で盛大な歓迎会を催した。

1965年 の時も アメリカ留学を希望する者の招待があり、辻取教授は
C.M.B. の資金で Chicago University に1年間 留学させて頂いた。

第7代部長 は 永井勇氏と思っていたところ、放散線の 林田
次長の話によると、永井氏が「予研長崎支部長」に就任されたのは 1957年
1月1日とのことであるから、Dr. Connell の退任との間に2年余りの
空白期間があることになる。

そこで色々 調べたところ、私のサイン帳(2)に Dr. James K. Scott の名が
あり、1955年2月11日のサインとなっている(私の渡米出発前、長崎で)、故に
この人が Dr. Connell 退任後の部長ではなかったかと思う。

Dr. Scott の名は前にも出ていたが、その名は Richard C. Scott で、これは
James K. Scott とは別人であることは明らかで、私が Rochester N.Y.
に赴いた Dr. Scott は1955年4月頃であったから James K. Scott では
なかった事も確かのように思う。Rochester で会った Dr. Scott は 熊鷹の
尻尾の弾痕が お上手だったという記憶がある。果してその人が Dr.
Richard C. Scott かどうか、どこかで調べて頂きたいと思う。

第8代部長 は確かに 永井勇氏に違いないと思う。但し当時は ABCC
の部長とは云わずに「予研衛生研究所長崎支所長」が正式の職名
だったとのことである(林田次長談)、然し ABCC 側の職名は
"Associate Director" だったそうである。

永井氏は1972年7月頃 病気になられたので、河本定之氏が
同年8月1日から「予研長崎支所長」として代行されたそうである。
永井氏は 1973年6月30日に正式に「予研長崎支所長」を退任
されたこととなっている。

次のABCCの代表者は河本定久氏で、永井氏^が退任された後は1973年7月1日から「市研長崎支部長代理」となり、ABCCが「放射線影響研究所」となった1975年4月1日以前はその役の職名であったが、その後「放射線影響研究所長崎研究所長代理」となり、長崎^{放射線}影研が1977年12月15日に「放射線研究所長崎支所」となったからは「放射線長崎支所長」となったのである。故に「放射線長崎支所長」といふ河本氏が初代ということになる。河本氏が長崎支所長を退任されたのは、1983年(昭和58年)3月31日であった。

その代 放射線研長崎支所長は藤倉敏夫氏で、就任は1983年4月1日、爾来今日に及んでいる。

「国立予防衛生研究所長崎支所分室」について

長崎では1954年3月31日に上記の分室が設置された。その事務所は長崎大学医学部第一外科教室(教授 調来助)の中の一室にあって、その看板を私(調教授)が25×35cm位の板に書いたとを憶えている。

分室内には机と戸棚が備えてあり、^{教室の難波雄哉が分室長を勤め、}長崎千鶴が事務を担当していたが、1955年4月1日から長崎大学医学部を卒業した平塚博(博の甥)が兼持っていた。この分室がいつ閉鎖されたかについては確かな記憶がない。私が第一外科教授を退任したのは1965年3月31日であった。

長崎 ABCC の所長以外に親しくしてゐた人達

(1) Dr. Warne Wells

1950~1952 頃には長崎 ABCC に居られたが、外科助教授 (North Carolina 大学) で、度々長崎に来て我々と懇談や討論をした。

- ① 1950年6月26日 —— 長崎に来て肺外科の話をし、我々と討論した。
- ② 1950年12月6日 —— 午の講義(癌診断法)があり、終つて大学の者だけ残つて座談会(喉癌及び食道癌)を催した。
- ③ 1951年3月1日 —— ^{長崎} ABCC で座談会(心臓外科)、午の討論会(14:00~18:00)
- ④ 1951年4月3日 —— 日本外科学会で講演(心臓外科)
- ⑤ 1951年6月20日 —— Dr. Wells 及び Dr. Adams と討論会(急性膜肺壊死)
- ⑥ 1952年3月18日 —— 私は ABCC に行つた。Wells と長崎地方の Kelloid 調査を協議す
長崎大学より Wells に記念品を送る。
- ⑦ 1955年3月30日 —— 私はアメリカ巡遊の時 North Carolina の Chapel Hill で彼と会い大妻と厄介になつた。

(2) Dr. Elmer A. Weden Jr.

彼は 1953~1954 年頃 Dr. Connell と一緒に長崎に居た人で、ABCC には ^{Dr.} Connell と共によく会つた。帰国後は San Francisco の近くの San Mateo に住んで居て、今年の 1955年2月21日に San Francisco に着いた時は夫人 (Mrs. June A. Weden, 日本語の上手な人で二世ではないかと思つた) と一緒に出迎えて頂き、再び San Francisco を訪れた時(4月)には彼の自宅に招待され、彼が勤めてゐると思われ、海軍の Radiological Defence Laboratory の人達と電報を共にし、帰りに Dr. Peter C. Nowell M.D. (N.R.D.L.) に San Francisco の宿 (Kusano Hotel) まで送つて頂いた。

(3) Dr. William J. Schull

彼は Ohio State University から来た遺伝学者で、1950年6月7日

に Dr. Yamazaki と一緒に大島に来る Round Table Discussion に参加したことがあつたが、すっかり忘れていたところ、1980年1月22日に大島で放射線理事会があつた時、偶然、彼から声をかけられ書いた。彼は放射線の研究担当理事として来任したので、理事会で度々お目にかかったことがある。

(4) Dr. Victor P. Bond

彼は私と一緒に1975年に放射線の非常勤理事となり、その後8年間、理事会毎に会つていたが、サイン帳(2)を見ると San Francisco で彼がサインを書いたところがある。彼のサインは Brookhaven Nat. Laboratory Upton L. I. New York と書かれているので、本来は Long Island の Brookhaven に住んでおつた。私が1955年3月22日に Brookhaven を訪れた時に^に居られなかつたから矢張り San Francisco で会つたのだろう。どこで会つたかは憶えていない。

(5) Mr. Kenneth B. Noble

長崎の ABCC には相当長く居たように思う。Australia から来た人で日本語が大変達者なつた。Dr. Wright が所長にいた頃、一緒に私の被曝線量を測定してくれた(奇事)。日本に散髪料が安く丁寧なところから Australia に帰つてそこで散髪せよと大急ぎで日本に帰つてからやると云つてくれた。渡米前にサインを書いたのがサイン帳(2)に書かれている。

(6) Mr. Lawrence H. Berlin

1955年に渡米した前は長崎の American Cultural Center に居て、私の Exchange Leaders Program の招待状を渡してくれた。正式には Foreign Service Officer of U.S.A だそうで、私のアメリカを回避していた頃は既にアメリカに帰つて New Jersey の Teaneck に住んでいた。1955年3月13日に

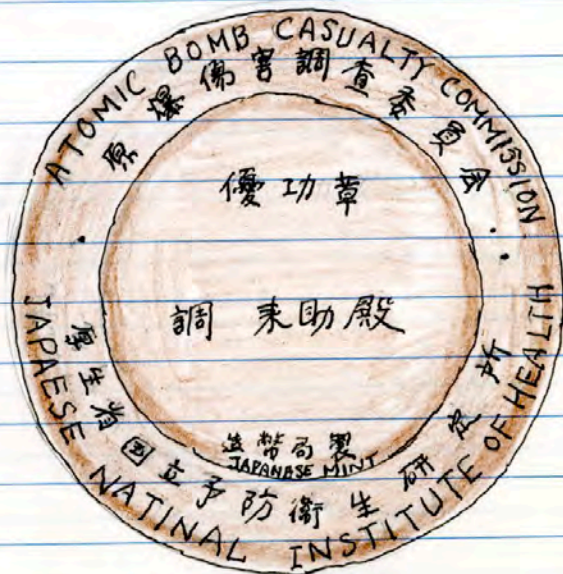
招待され、彼の豪華な邸宅を訪れ、大変な款待を受けたことが私の旅行日記（世界一周の旅(1)）に書かれている。彼のサイロは1955年1月28日（水曜日）に長崎で見たことがサイロ帳(2)に描かれている。

ABCC から 優功章メダルを戴いたこと

私の昭和44年（1969年）の日記に次のようなことが書かれている。
 （2月15日） 今日 ABCC から是非来ようよと云われたので、正午に行くと、古屋野宏平先生に来ておられた。アメリカから Dr. Dunham（Dr. Canman の後任、原子力委員長）その他が出席していて、約20人が昼食を共にした。その席で、古屋野先生と一緒に下図のような優功章のメダルを戴いた。



（表）



（裏）

1975年に ABCC が 放射線影響研究所 (放射研, RERF) に 改組された後の 私との関係

1975年 1月20日

今日、厚生省公衆衛生局の佐分利局長から「放射研の非常勤理事になって欲しい」との電話がかかったが、この事により今泉課長から話があった事は承諾していいので、局長へすぐに諾意を告げた。2月6日の發会式に出席してくれとの事だったが、辞令も貰っていないので出席をお断りした。その件は理由があったかも知れないが、記録がないうので不明。

1975年 3月14日

本日の厚生省の原爆被爆者医療審議会が都庁7階で行われたが(10:00から15:00まで)、その後 ABCC 改組後の理事達が集って最初の顔合せが行われた。理事長は山下久雄氏。その時今泉課長から種々説明されたが、初めての事だったのでよく理解出来なかった。17:00から東坂見付のレストラン松本で晚餐会があり、19:00に終了。ホテルに帰る(日記による)

1975年 4月14日

第1回理事会が山下理事長の司会の下に広島放射研で開催された。私出陣会幹に河本定久君(長崎放射研所長代理)の引率で広島 ABCC の研究所を一巡視察した。

会議は10:00に始まり、昼食記念撮影の後再び会議となり、15:15終了。理事会は9日1日限りで、終了後即日長崎に帰る。

1975年 9月24~26日

第2回理事会が広島放射研で3日間に亘り、山下理事長の司会の下に開催された。河本長崎研究所長と一緒に出席。

1976年 6月 8~10日

第3回理事会 が広島放影研で山下理事長の司会の下に開催され河本君と共に出席したが、第1日の6月8日から発熱、胸内苦悶等あり、理事長から薬を戴いて服用したせいか9日は熱も下り気分も少し回復した、会議には3日間共出席したが、パーティー、レセプション等は失礼して床に横たっていた。10日は正午までで会議終了、即日帰郷。

この年の理事会は以上の1回限りであった。

1977年 1月31日、2月1~2日

第4回理事会 が上記の3日間広島放影研で開催されたが、私は風邪をおして出席した為か微熱、咳嗽があり、第1日の1月31日は会議に出席したが、その夜悪寒があり、第2日の2月1日には発熱、咳嗽がひどくなり(急性気管支炎)会議に出席出来ないで、寝込むようになったことは皆さんに迷惑をかけると思い、理事長にお願してその後の会議を失礼して2月1日に長崎に帰った。自覚で2~3日病床につく。

1977年 6月 22~24日

第5回理事会 (広島、山下理事長)

河本君と一緒に出席したが、広島に着いた夜から腹痛が起り、22日の会議には出席したが、パーティーには欠席。河本君が張弓など部屋に招いて来てくれた。23日は腹痛が軽快し、最後まで出席、社には知事と市長の招宴があったが、一寸顔を出しただけで比治山ホールに帰った。会議は今回限りで終了、24日はそのまま長崎に帰った。

1977年 12月 15日

私はこの日に、山下理事長から、「放影研長崎支所担当顧問に任命され、毎週火曜日に出勤する」となった。

1978年1月24、25日

第6回理事会 (長崎, 山下理事長)

初めての理事会が長崎で開催された。会場は中島会館の2階
24日は会議終了後、夜は38℃の寒熱と下痢があったが、
25日は熱し下り、夕飯を飲んで出席。長崎支所担当顧問
となった挨拶。今日13:00で理事会の全部終了、昼食しとらず、
17:00からの長崎支所主催のパーティーにも欠席し帰宅、就床。

1978年6月27・28日、

第7回理事会 (広島, 山下理事長)

27日の理事会は難なく終了。夜は日本側理事、事務局長、
厚生省の局長等が山下理事長に招待され、後任理事長の件
につき協議して9時散会。比治山ボールに帰る。

28日は理事会で後任理事長に玉木正男氏が円満決定。
山下理事長の退任挨拶、玉木新理事長の就任挨拶があり、夜はパー
ティーは山下理事長の送別式があって、すぐ部屋に引き上げた。

1979年1月23・24日

第8回理事会 (広島, 玉木理事長)

玉木理事長の初めての司会、無難に終了。2日間を終了

1979年5月22-24日

第9回理事会 (広島, 玉木理事長)

歯痛のため欠席しようと思ひ汽車の切符をキャンセルした。21日夜
歯科医の治療で疼痛が軽減したので、沢本君に電話して、22日朝出勤
14:10に広島着、会議場に直行した。23日は終日会議、24日は
12:30 終了。すぐに広島を去り帰宅。

1980年1月22・23日

第10回理事会 (長崎、玉木理事長)

長崎の出身会館の開催、2日間に理事終了

1980年6月10・11日

第11回理事会 (広島、玉木理事長)

米人理事3名欠席。10日午後理事会開会後、上田組合長外3人(内2人女)と日本人理事と会見^{した}、組合側では上田組合長が一人で発言し、理事側では安田理事と私が発言し、大したトラブルもなく終了した。

11日は長崎支所の移転問題が主に討議され、18・10巻の新幹線に乗って同夜帰宅、

1981年1月27・28日

第12回理事会 (広島、玉木理事長)

2日間に全部理事終了。長崎支所の移転問題では皆から賛辞を戴いたが、これは河本支所長が受けるべき筋合のものであった。

1981年6月9・10日

第13回理事会 (広島、玉木理事長)

被爆爆薬の訂正の問題、研究員の定年制等が討議され、2日間に全部終了。来⁽¹⁸⁾年の理事会をワシントンで挙⁽¹⁸⁾げることが議題によったが、予算の問題で行きつまり、その後^(26月)に持ち越された。

1982年1月26・27日

第14回理事会 (広島、重松理事長)

次の6月の理事会はワシントンで開催されることになったが、欠席する由を津森事務局長に申出た。河本君と鍵石君が近々定年退職になるといふので河本君を後にして貰いたいとも申出た。理事会は2日間に終了。

1982年^{6月}16-18日

第15回理事会 (ワズナ、重松理事長)

私は欠金の未出席することにしたため、理事長から6月13日に「理事長不在の間理事長代理を命ずる」という辞令を戴いた。6月19日に柳沢理事が急逝され、21日に東京で葬式があるから理事長代理として参列に賛意の報を受けたりで、20日に南次長と一緒に上京、葬儀に参列して22日に長崎に帰った。

ワズナワズの理事会の出席は河本君は26日に長崎に帰ってきた。

1983年2月17・18日

第16回理事会 (長崎、重松理事長)

この年は2月14・15日には旅影研の専門評議会があり(長崎)、ホグバーとして出席した。(パークサイドホテル)

理事会はパークサイドホテルで行なわれた。17日は伊勢宮会館、18日は雲仙の観光ホテルで、ワズナワズで接待の送迎の予約がしてあったが、私は風邪気味の為両方欠席した。

1983年6月8・9日

第17回理事会 (広島、重松理事長)

河本君は4月29日に旅影研の退任式があって以来理事会には出席しないこととなり、今度から藤倉敏夫氏が長崎支部長として出席。6月8日に非常勤理事の松氏と私も退任が発表され記念品に素晴らしい首を頂戴した。私の後任には旅影研の代表松本支部長の河本定久君が決った。

6月9日は午前中に理事会が終了し、午後13:08広島発の新幹線に長崎に向った。その日河本君は広島に来たことが会うことが出来た。

1983年 6月

私の放射研非常勤理事は、辞令が来たが昭和58年6月で
退任したことになる。同時に昭和52年(1977)12月15日付で
山下理事長から任命された「放射線影響研究所長崎支所
担当顧問」も退任となった筈である。但し辞令はない。

1983年 7月1日

重松理事長から「財団法人放射線影響研究所名誉顧問」
を委嘱された。以後今日に至る。

1984年 6月1日

この日に重松理事長から「放射研歴史編さん委員会アドバイザー」
を委嘱された。任期は昭和60年3月31日までと記載
されている。

1

昭和20年(1945)8月9日に原子爆弾が長崎市松山町の上空で炸裂し、当時長崎医科大学の付属病院長だった内藤勝利教授が爆死したので、私はその後任として同年8月9日付で付属病院長に任命された。退任したのはそれから3年5ヵ月後の昭和23年12月28日である。

長崎医科大学は原爆によって基礎医学教室も付属病もすべて灰燼に帰し、医科大学としての機能を全く喪失したため、20年9月24日から大村海軍病院に寄寓することとなり、急性放射能症で病床に臥していた私が大村に行ったのは、翌々日の9月26日であった。

その頃海軍病院には、アメリカの医学者や軍医の人達が、原爆傷害の調査研究のために寄宿しておられたが、私が9月26日に会ったのは次の人達であった。

Dr. Henry L. Barnett (団長), Dr. Joe W. Howland, Ph.D.
Dr. H. O. Whipple, Dr. B. M. Brandage,

以上の人達は10月5日に海軍病院を去って帰国されたが、その後継の研究者は9月末に病院に到着しておられた次の人達であった。

Dr. Elbert De Coursey (団長), Prof. Shields Warren,
Dr. Harold Schwartz, Dr. Samuel Berg,
Dr. Robert H. Ebert, Dr. Herman Tarnower,
Dr. Thornton Taylor Perry, Dr. George V. Le Roy
この人達は長い間滞在して、大村海軍病院と長崎新興普光学校(通称救護所)に別々、研究や調査に従事しておられた。

以上の外に東大医学部からも都築教授を団長とする研究団があり、長崎医大では生残りの教授、助教授、助手、学生達が海軍病院に寄住しながら大学の再建のために働いていた。私は学生を指揮して8000余人の被爆者を調査した。

長崎医科大学は昭和21年5月1日に進駐軍の命令により大村海軍病院から佐世保海軍病院諫早分院に移転し、22年9月には基礎教室が長崎の大学付属病院外來本館を改装して長崎に復帰した。24年には長崎医科大学が長崎大学医学部と改称され、25年には臨床各科が諫早及び新興普から浦上へ復帰、その後諫早は長崎大学医学部付属病院諫早分院となって昭和38年3月31日まで存続した。(長崎医学同窓会会員名簿による)

長崎にABCCが設置されたのは、「長崎原爆戦災誌、第4巻」によると、昭和23年(1948)7月で、初めは「長崎保健所」の一部を借りて活動を開始した。

初代所長は Oregon州の Portland から来た Mrs. Elizabeth J. Creighton (Public Health Nurse) で、私は大学の付属病院長だったので、数人の者と一緒にあるパーティーに招待されたことがある。その時私は風邪気味で、口が乾いたので水をお願いしたところ、water の発音が中々通じなくて困ったが、何べんか「ウォーター」を繰り返したらやっと通じて「オー、ワラー」と笑いながら水をコップに戴いたことを憶えている。色つ白い、太った、綺麗さ30才余りの女性だったように記憶している。日本武官の便所に困って遠く所まで出かけられるという話を聞いたこともある。いつ迄居られたかは記録がないので不明である。

第2代所長は Dr. Robert K. Kurata だったが、何年頃には初代の Mrs. Creighton と交替されたかは不明である。しかし Dr. Kurata が長崎を去られたのは昭和25年2月8日(944日記による)であり、長崎にABCCが開設(23年7月)されてから1年7ヶ月の間に2人の所長の勤務されたことになる。昭和23年及び24年9日記がないうので確言は出来ないが Dr. Kurata の勤務期間は1年ぐらいいはなかったかと想像する。

Dr. Kurata は 昭和 30 年 (1955 年) に アメリカ を 巡遊 (たがひは ~~4月頃~~) Los Angeles に 居られ、同年 4 月 5 日に 私の サイン 帳長 に 記名 されている (富田 克太郎、倉田 操)

第 3 代 所長 は Dr. James N. Yamazaki で、昭和 23 年 2 月 6 日に Dr. Kurata と 一緒に 私の 所 に 交替 の 挨拶 に 来られたことが 日記 に 記されている。

Dr. Yamazaki の 所長 時代 には 私 と の 間 に 色々の 事 が 行われた。

(1) 昭和 25 年 (1950) 6 月 7 日に Dr. S. J. Kimura (眼科医), Dr. W. J. Schull (遺伝学者), Dr. S. Takeshima (通訳) を 連れ て 大学 に 来られ (埼玉の 病院 だったか、新興善 臨時 病院 だったか 不詳)、原爆 座談会 (Round Table Discussion) を 行った。私が 司会者 となり、被爆 生存者 13 名 (医師、看護婦、その他) を 集め、影浦、広瀬、和泉 の 3 教授 も 陪席 した。

この 内容 も 英文 で 発表 されたか、どの 雑誌 に 発表 されたか 憶えて いない。手許 に 印刷 がある だけ である。

(2) 私は 昭和 20 年 10 月から 12 月 まで 7 週間に 生残り の 軍医 局 員 及び 学生 と 一緒に 被爆者 8000 人 余りの 調査 を 行い、これを 整理 し 「長崎 に 於ける 原子 爆弾 傷害 の 統計 観察」

第 1 編	被爆者 の 死亡率	第 2 編	受傷者 の 死 亡 時期
第 3 編	外科 的 損傷	第 4 編	被爆者 の 放射 線 病

という 論文 を 書いて いたが、未発表 の まま 放置 されていたので、これを

ABCC に 勤務 中 の 佐崎 氏 に 英訳 させ、それを Dr. William S.

Adams, Stanley W. Wright, James N. Yamazaki の 3 人で 要約 し 1953 年 の Military Surgeon に 私 の 名 で 発表 していた。これも Dr. Yamazaki の 仕事 だった と思う。

(3) 私が 昭和 20 年 に 学生 達 と 調査 した 調査票 は 5000 枚 余り あり、それを 諫早 の 自宅 に 保管 していたが、

とこちとこ鼠に食われて破壊したので。Dr. Yamazaki に
お願いして ABCC に保管して置くことになり、昭和26年(1951)
5月28日にジープで諫早から長崎に運んでいただいた。

Dr. Yamazaki は ^{同年}5月21日^{た長崎を去られた}送別会があり、大学からは頼尊
北村、林、堀らが出席し、^{と同日には長崎に到着された}5月30日^{と同日には長崎に到着された}に長崎を去られた。
私がアメリカも巡遊した1955には、Los Angeles で小児科
を閉業しておられ、大変御厄介になられた。今年(1984年)5月
5日に夫妻お揃いで長崎に来られ、29年振りに面会した。

第4代所長 は Dr. Stanley W. Wright で、夫人の
Dr. Phyllis Wright も来っておられた。ABCCの所長にな
られたことが憶えている。Dr. Wright は前から ABCC に
居られたが、所長になられたのは Dr. Yamazaki が長崎を去られ
た後だったと思う。Dr. Wright の所長の時に、活水短大の
英文科を卒業した私の妹 朝子 (Choko) を ABCC の統計部
に採用していただいた。

昭和27年(1952)4月25日に Mr. Noble を連れて大学
に来られ、私の破傷距離、海況状況などを精密に測定して、私の
破傷線量を 50 rad (多分そのくらいと記憶する) と規定された。

Dr. Wright からは医学雑誌を貸していただいたり、stereoscope
を貸して頂いたりと大変親切にしていただいた。又8月9日の慰霊
祭の日には大学、慰霊碑にお花を供えていただいたこともある。

Dr. Wright が長崎を去られたのは ^{1952年}9月7日であった。所長勤
務は1年4ヵ月間ということになる。夫妻はヨーロッパを廻って帰来
された UCLA に勤務中に Los でお逢いしたが、まだ若い頃に亡
けられたそうなので意外であった。夫人はまた健在の由 (昭和59年記)

第5代所長 は Dr. Frank H. Connell で、昭和27年(1952)
11月6日に新任の挨拶に長崎大学に来られた。しかし Dr. Wright が

the ABCC と 4cc の関係とに於

1969年 2月 15日 12

ABCC から像 取 得 可 能 性 有 無

見 込 込 込 ABCC 2 x 11 cc

Dr. Dunham (Dr. Dunham の 姓 名、 2 の 力 委 託)

加 東 分 局 古 代 史 学 部 取 得 可 能 性 一 緒 に 手 続 書 入

出 産 可 能 性 有 無 取 得 可 能 性 有 無 取 得 可 能 性 有 無

Cunham Cunan

Cunham

Charles L. Dunham

Dunham

Division of Biology, medicine

Atomic Energy Commission

C. Scott のサイエが 私のサイエ帳に書かれているので、或いは Dr. Scott が 所長代行 みたいな職についていたのではないかと思う。それが事實とすれば、Dr. Scott が 第5代 所長で、Dr. Connell は 第6代 所長と云わねばならない。

Dr. Scott が 長崎に居られた頃、私は特別に親交がなかったとみて、彼の名は日記に書かれていないが、私がアメリカ各地を巡遊した時、彼は Rochester N.Y. の大学に居て、私はわざわざ彼を訪ね、Rochester に 1泊して翌日彼の紹介で、Dr. Earle B. Mahoney の心臓の手術を見せと貰ったことを憶えている、だから長崎にも或る程度、交際があったものと思われる。

Dr. Connell とは不思議な縁で長い間 親交を続けている。私の日記は 1950 年から 1953 年の半ばまでは書かれていないが、その間に彼々ととは 次のように記されている。

1953 年 3 月 6 日に 広島の ABCC で annual meeting があり、私も出席して フロイドの報告をしたが、その時彼から スライドを作ったことを憶えている。3 月 19 日には長崎の ABCC で 懇親会の例会が開催されて大学からは 9 人の教授が出席した。Mrs. Connell 同席されたように日記に書かれているので、或いは親睦パーティーの様な会であったかも知れない。この様子は初めてだったので、恐らく Dr. Connell の発案で、ABCC と大学との関係を緊密にしようとの試みだったとも思われる。

その後 4 月 17 日に ABCC を訪れた時には彼から ABCC の将来についていろいろ諮問されたので、医学部長にはかり、4 月 23 日に「ABCC の在り方」に就いて教授座談会を開催し、30 日には ABCC の所謂 sub-committee にも出席した。(1954 年)

このように親交を重ねているうちに、6 月頃だったか彼は私を GHQ の Exchange Leaders Program に推薦すると云^わたされた。余り突然な話なので本気にもせず、7 月 1 日には私と教授と一緒に

彼を訪ね 患者診察の事など相談した。~~後~~。

(私の日記は 7月2日までで 先が書いてあるので、彼はいつ 長崎ABCCを
去られたか 不明だった。別の日記で、同年10月11日付の手紙を Washington
から戴いたことが分った。故に彼は 1954年7月から9月までの3ヶ月の間に
アメリカへ帰国されたことになったのである。彼から手紙を戴いた後、長崎のフカ
文化センターの館長 Mr. Berlin の来訪があり、新聞記者のインタビューなど
があり、11月26日には 知事、市長、大学長、医学部長、ABCC の Dr. Scott
等の臨席の下に 正式に Invitation の封筒を戴いて Leaders Program
の一員に採用されたことが確定したのである。

私は 1955年2月から5月までの3ヶ月間、アメリカ各地を歴訪して
大学、大病院等を視察に廻った。同様に Dr. Connell の推薦で
Leaders Program の一員となった 朝長正允君も同じ時期に訪米
して、彼とは Boston で会うことが出来た。

Dr. Connell はアメリカに帰国後、China Medical Board の
副所長をされたり、Houston の Post graduate medical School
に勤務されたようで、私はアメリカを訪れた時は Washington D.C.
の 2716 38th St. NW に住んでおられた。C. M. B. に居られた
頃にはほぼ隔年に (1961, '63, '65, '67) 日本、中国^東南アジア等を訪問され、
その都度 私の家に逗留されたので、その時は医学部の専任部や、
知人 7-8人が私の家に集って歓迎会を催すのを例とていた。

- ① 1961年 — 北村精一 学長夫妻、中沢与四郎 医学部長夫妻、ABCC 永井勇氏、
9月8日 田崎通治 (私の養父、1958年から1年間アメリカ留学)、松本夫婦
- ② 1963年 — 和泉敏之 局長、後藤敏郎 医学部長、中沢教授夫妻、永井勇氏、
4月13日 辻田教授、秦生滋 助教授、玉置、調夫婦。
- ③ 1965年 — 後藤敏之、小池教授、永井勇氏、辻田教授、秦生助教授
5月7日 玉置、調夫婦。

④ 1967年 — 三原教授、小池教授、朝長教授、辻野教授、永井博士
7月5日 返答。 彌夫婦。

1963年には China Med. Board から大学に図書館を寄贈して載ったので、
私や家での歓迎会ばかりでなく、翌日は同書館の寄贈式の後校後全員で茂木の
ビーチホテル^{の庭}で盛大な歓迎会を催した。今も写真がアルバム4に遺っている。

1965年の時は アメリカ留学希望者の面接があり 辻野教授は C.M.B.
の資金で Chicago University に1年間留学させて頂いた。

第7代所長 は永井博士と思っていたが、放影研の林田次長の話
では 永井氏が 予研長崎支部長に就任されたのは 1957年（昭和
32年）1月1日とのことであるから、Dr. Connell が 1954年8-9月頃に
退任された後 2年余りの空白があることになる。

そこで色々調べていたら、私のサイ2帳には Dr. James K. Scott
の名があり、1955年2月11日のサイ2となっている。私の Invitation の
書類を戴いた時も、その訪米の名 2月14日に長崎に出發する時も
ABCC を代表に来られたので、この方が Dr. Connell の次の所長では
なかったかと思う。この人の Home はサイ2帳によると 258 Culver
Road Rochester, N.Y. となっている。それで私が アフリカ巡歴の時
Rochester 大学を訪れた時の Dr. Scott かと一応 疑ったが、あれは
Richard C. Scott であり、私が Rochester を訪れたのは 1955年
4月下旬であるから Dr. James K. Scott の長崎に居られた時から 20月
しか 経っていないので、Dr. James Scott ではないと思われるのである。
然し その真は未だに判明しない。とにかくこの辺で頂きたいと思う。

第8代所長 は確かに 永井博士だったと思う。但し当時は ABCC の
所長とは云わずに、予研の長崎支部長と云われたとのことである。でも
ABCC 側の職名は Associate Director だったと云う。

永井氏は 1972年7月頃 病気になられたので、河本定久氏
が 同年8月1日から 予研長崎支部長代理として代行されたそうぞ

永井氏は 1973年 6月30日に^{正式に} 市研長崎支部長を退任された
とされている。

次々ABCC代表者 は 河本定久氏で、永井氏が退任された
後 1973年 7月1日からは 市研長崎支部代理となり、ABCC の
放射線影響研究所となった 1975年 4月1日以前は その役名で
あったが、その後は 放射線影響研究所長崎研究部長代行となり、長崎の
放射研が 1977年 12月15に 放射線影響研究所長崎支部となつてからは、長崎支部長
となつてゐる。放射研長崎支部長としては 河本氏が 初代といふことになる。河
本氏が 長崎支部長を退任されたのは 1983年 (昭和58年) 3月31日である。

第2代放射研長崎支部長 は 藤倉 氏で、就任は 1983年 4月1日。
現在に及んでゐる。

長崎に「日本予防衛生研究所長崎支部分室」というのがあつた。これは
林田次郎の話によつて 1954年 3月31日に出来、事務所は長崎大学医学部
第一外科教室(教授 調来助)の中の一室にあつて、その看板を(科、調教授)
が 25×35cm 位の板に書いて置いたと憶ふ。

室内には机と戸棚が置いてあり、浜崎千鶴氏が事務を担当してゐたが、
1955年 4月1日からは 長崎大学医学部を卒業した 手塚博(科、調)が受持
つてゐた。この分室がいつ閉鎖されたかについて確かな記憶がない。
科が第一外科主任教授をやめたのは 1965年 3月31日であつた。

①

1950年 (昭和25年)

(私の日記の
抜粋)

1月11日 (水)

午前に、軍政府跡に移った ABCC の倉田君 (Dr. Robert K. Kurata) を訪問。遠傳関係の Dr. Schull が来ている。1月末に広島に行くことを話した。Dr. Tessmer に問合せの由。

1月25日 (水)

ABCC に電話、倉田君と広島行きを打合せた。

1月27日 (金)

今日も Mrs. Baca の新興善病院視察から戻った。

1月30日 (月)

9時に迎いの車が来て、宇品の ABCC に行く。皆の凱旋館、Mrs. Green, 梅所長を訪問。研究室内を一巡。驚くことばかり。Dr. Tucker にも会った。瀬戸口、石井、大倉の諸君にも会った。午後、建築中の比治山の新研究所を見。爆心地 (相生橋の側) に行き、講演をする。聴衆約30人、外人も4-5人居た。

2月6日 (月)

ABCC の倉田君と山崎君来訪。倉田君は明後日広島へ赴任の由。

2月15日 (水)

長崎に行く (当時私は諫早に住む) ABCC の本を送し。又一冊借りた (肺結核空洞外科)

3月31日 (金)

Tessmer 大佐が来るというので、長崎に行く。教授数名と共に Tessmer 大佐の話を聞く。ビールが出た。

4月13日 (木)

GHQ から イルズ が来て、経済学内学校で話をしたら、皆聞きに行くようにとのことで、7時の汽車で行く。12時半に帰り、私は新興善から浦上へ行き、外科病棟は元の操にするように云って帰途につく。

6月7日 (火)

(2)

ABCCから Dr. Yamazaki, Dr. Kimura, Dr. Schull が来て、原場屋
談会 (Round Table Discussion) を開いた。調(和)が司会した。
影浦、広瀬、和泉の3教授も出席した。

6月16日(金)

今月末広島ABCCから Dr. Wells が来て、長崎の外科医と懇談した。由、

6月26日(月)

午後 Dr. Wells が来て 肺外科の話をした。

8月14日(月) ~ 9月5日(土)

大阪大学医学部で「日米医学教育者協議会」が催された。協議会
とは名のみで、実際は米国教授達の講習会で、私は主として麻酔の
話を聞いた。(担当者は Dr. Saklad だった)

12月6日(水)

午後1時半から Dr. Wells の講義(癌診断法)があり、終って
から大学の者だけ残って座談会(胃癌及食道癌)があった。

1951年(昭和26年)

2月19日(月)

ABCCの Dr. Yamazaki が新井善に来訪、先日の Embryoma
の患者の話を話す。Dr. Wells は 28日に来崎の由、

2月28日(水)

Dr. Wells の座談会(ABCC内)の予定だったが、京大松尾巖名層
教授の講演(腰痛について)が中止となった。

3月1日(木)

Dr. Wells との座談会のため長崎に行く。テーマは心臓外科。午後
2時から6時まで討論した。

4月3日(火)

日本外科学会総会にて Dr. Wells (ABCC) の心臓外科の講演を聞く。

4月9日(月)

(3)

1951年(昭26年)

新興善に行つた。Duke 大学之長 Dr. Davison と ABCC 所長 Dr. Taylor が来つた。学長室に会議す。午後浦上に行き新外科病棟を視察した。

5月14日(月)

ABCC の事で諫早から長崎に行き、新大工町で Dr. Yamazaki, 佐々木清治氏と話す。(私の被爆者調査の論文英訳発表の事か?)
Dr. Wallenstein に会う。

5月21日(月)

夕方 Dr. Yamazaki の送別会に出席(頼尊、北村、林 邦彦と)

5月25日(金)

夕方 ABCC に行き 原爆調査票 (私が学生と一緒に1948年に調査したのも、約5000余枚) を28日に ABCC へ運んで貰うように Dr. Yamazaki に頼む。尚破損した shaper 万年筆の修理も7+4カで貰うように彼に頼んだ。

5月28日(月)

9時頃 ABCC のジープが来たら調査票を渡し、中沢教授と一緒に長崎へ行く(諫早から)。ABCC に調査票を Dr. 山崎に渡す。午後和泉教授が来たら11時頃まで一緒に話し込み、Dr. 山崎が新興善に別れの挨拶をたいというので案内した。

5月30日(水)

Dr. Yamazaki は今日長崎を去つて帰国の途につかれた。
皆心長崎駅に見送る。

6月20日(水)

ABCC に行き、午後2時より Dr. Wells 及び Dr. Adams と急性膀胱壊死について討論した。

11月26日(月)

ABCC の二世人の shaper 万年筆を持って来た。5月に Dr. 山崎に7+4カでの修理を頼んで貰った。

(4)

12月23日(日)

10時と11時にトラックが来たので、家族道具を積み、長崎の新居の移転^先に送る。午後2時にバスが来たので、叔父の家族と一緒に長崎へ行く。これで5年間の鎌倉居住に終止符を打ったことになる。

1952年(昭和27年)

1月21日(月)

日本学術会議 会長から手紙来る。ABCCの屈辱傷害はついでの名義があるとのこと、和泉教授(当時医務部長)に電話して出席して貰うことにした。

1月23日(水)

北村教授(和泉君と私と二人は親友)から電話で「ABCCの幹部との十部議会(東京)になせやかなかつたか」と云われながら、和泉君に代理を頼んだ理由を話しなう、了解してくれようね。(多分和泉教授が医務部長だったから)

1月24日(木)

ABCCに行き、朝子(Choko、私の娘、治北短大英文科卒業予定)の就職を頼む。

1月28日(日)

Dr. Wellsに記念品と贈り物と決定(何の会で決まらなかつた)。

2月22日(金)

ABCCの小谷君に電話。Dr. Taft 来訪(どの様子が記憶がない)。

2月29日(金)

朝 ABCCに行く。海崎君に Dr. Wells 宛の贈物を託す。

Dr. Wright に会う。娘、朝子の ABCC 就職はほぼ決定。

3月18日(火)

朝 ABCC に行き Dr. Wells と 長崎地方の「人口」調査につき協議。午後3時より中講堂で報告会、私は長崎の「人口」について報告。北村教授は先天的梅毒、朝長君が白血病、会は午後7時半で

(5)

1952 (昭和27年)

あり、7食后も医師会館で報告会あり。

4月11日(金)

ABCCの電話。日本外科学会に出発前等に話があった。原爆死亡者の骨を採取するように話したら、骨採取に当たると4~5個渡す。

4月23日(水)

午後 ABCC の西村女が腰痛の受診に来訪。神経痛らしい。

西村女と一泊して ABCC に行き Dr. Wright に会う。何となく淋しそうだが、図書室で雑誌を借り、朝子と帰る。

4月25日(金)

午後2時半頃 Dr. Wright と Mr. Noble 来訪。原爆当りの様子を見せられる。6時半まで現場を測定し、問診された。大いに話がはずむ。(この測定で私の被曝線量は 50 rad と決定している)

5月14日(水)

午後 ABCC の西村女が米人女性と連れに来た。文献の件。

5月16日(金)

ABCC に行き 図書室で雑誌を読む。正午は ABCC の人達と食事をした。

5月19日(月)

ABCC との約束で 9:30 頃迎える車で行き。1年10月の女子診察鎮痛剤で腹腔直腸痙攣があり、S字状結腸に蕁癢を触れる。status inversus があり面白い患者。官費入院させる予定 Dr. Taylor に会う。

6月30日(月)

ABCC から 先天性経輸胆管閉塞の患者を送ってきた。

7月7日(月)

9時に ABCC に行き stereoscope を借りて来た。

Dr. Wright が快く貸してくれただけで心から感謝した。

7月14日(月)

ABCC の レイノルズ氏が会いたというので迎えへ車で行く

⑥

1952 (昭和27年)

大した用にはなかった。人類学者がそうで、実際は和泉・安中西教授に
会ったことがそうだ。

7月31日(木)

3時頃 ABCC から Green Shaw (尚紅蓮) という人が来て、和泉君の部屋
で会う。401号室の打診。広島の女連が東京に行つて手解と愛憎とが
アフリカに南に、sensations をまき起しているそうだと、長崎の調査を約束した。

8月9日(土)

7ビロカ丘の慰霊碑に参拝したら、Dr. Wright から生徒が供えてあった。

8月11日(月)

ABCC に Dr. Wright を訪ね、原爆研究に協力方を頼む、快く引き受けて
頂いた。午後調査の案を練る。

9月3日(水)

朝街に行き Dr. Wright に贈るスリ箱と買ひ、午後朝子(44号)と
秦野君(私の教室員)と3人で ABCC に挨拶に行く。大歓迎された。

9月7日(日)

12:30 の汽車で長崎に出る Dr. Wright 夫妻を駅に見送る。大勢居た。

10月18日(土)

ABCC に行き Dr. Wenden に面会す、丸善のワイシャツを買ひ
海崎氏(44の被爆者調査報告書を英訳してくれた人)に進呈した。

11月6日(木)

午後4時 今迄 ABCC 所長に新任した Dr. Connell が挨拶の為
来訪、和泉部長室に集り種々の話をした。

11月9日(日)

上長崎小学校の ground で催された ABCC の運動会を見物に行き
12時 朝子と共に帰る。

1953年(昭和28年)

3月6日(金)~7日(土)

⑦

原爆傷害の報告会が2日間、広島ABCCで開催された。出席す

3月13日(金)

ABCCに行き、原爆傷害の写真撮影の件を交渉、Dr. Taffin会す。

3月15日(日)

ABCCと約束した被爆者の写真を写真撮影に廻す

3月19日(木)

今日はABCCの懇親会例会^{の日}、方々へ電話で連絡して大学からは以下9人の教授が集った。(北村、和泉、松岡、林、友永、豊倉、三谷、古屋野学長、宮岡) Dr. Connell 夫妻も勿論参加。(この懇親会は何處で、どんな風に行われたか記載がないので不明、恐らく親睦の層、時々、行われたものと思われるが詳細の記載はない)

4月7日(火)

ABCCに行き、広島からDr. McManey, Dr. Wood が来っていた。原爆傷害の写真を見せ、広島での打合せ会の日取を訊く。明日返事ある由。

4月17日(金)

ABCCに行き、松崎氏、小谷氏、練石君、Dr. Connell 等とABCCの将来の事につき談合す。

4月18日(土)

和泉教授に会い、ABCCの件について相談す。

4月22日(水)

ABCCの件で会議。「大学教授連盟評議員」の選挙あり。

4月23日(木)

ABCC座談会。「ABCCの在り方」これはDr. Connell から要求された議題。

4月30日(木)

3時よりABCCの所謂 sub-committee に出席、6時頃 散会。

7月1日(水)

和泉君とABCCに行き、Dr. Connell Dr. Weden に会い、患者診療の事を相談し、6時頃が帰宅。(私の日記はこの道で後はあり)

1950年 (昭和25年)

① 1950年1月11日 (北) (昭和25年)

午前に軍政府跡に移つた ABC の倉田君を訪問。遺囑開封の爲に
Schull が来っていた。一月前見た島に行ふことを話した Tasmer に同乗の由

① 1950 (昭和25年) 1月25日

ABC の 組合 食料品と衣類の組合 等々。 4月7日 三田尻 + 泉生病院は 徳山の 5 年 生 児を 見舞う 援け

④ 1950年1月27日

4/12/70
今日 BACS, 新興^{湖北}黃陂

① 50年11月30日 9時40分 奥平月動車来り 学舎よりABCCにゆく。昔の凱旋館

Mrs Green 模部长と子供、研究船と一巡、薈く北のり、Tucker 北のり、
頼平、石井、大宮、諸君の会、北のり、北のり、新研究船(建築中)を見、模の地
(相生橋の北)の行、海濱と、船乗の30人、外人と4-5人、北のり。

②1950年 2月6日 APCC 食田君と山崎君来訪. 寛西局北沢俊之氏と北任9氏

2月8日 朝花吟に 虎田品、思道、上村

④ 69504 2月15日 长岭入世 ABC 吨E通。又一本借江表托 T 行估核算
调外所

① 1950年 3月31日 $Tesmer$ 大佐が私の出陣の報告を以て 敬復報告した。
 $Tesmer$ 大佐と面談した。その結果、

④ 4月13日 中野H2から 11時半から2時半に改定から15分55分まで 運転あり
740号車を2台 (標準上) 12時20分間、所定限外者11台あり。

⑥ 6A7A (-L)

牛指成 13000 加斗 山崎、永村、Schull 等以 乘乙 聖母座造多在 1400 年。

研讨会、圆桌：在会议上发言 (Round Table Discussion)

④ 6月16日(金) 今月書 花島日記 Dr. Wells 手紙の肉 吉田の所解区と税と費(土地肉)
6月26日(月) Dr. Wells 肺外科、海足(花) (朝鮮語等)

6月26日 (日) Dr. Wells 肺外科, 海尼(女)

(朝鲜战争)

④ 日本医学教育者協同会 (

④ 12月6日 Dr. Wells 及 强福 (ABC) 治疗开始, 效果良好。因青霉素
过敏, 改为大剂量 + 苯妥英钠 (思通, 金达康)

1951 (WW 26 年)

206号、諺早住の、
長崎の汽船がゆく。

④ 1957 (年 26日) 2月 19日 (月)

ABCC の Dr. 山崎 杉野 先生に依頼。先日の患者 Embryoma の検査を依頼。
Dr. Wells は 28日 杉野 先生に。同日先生より 杉野 先生に。腹痛の検査を依頼。

2月28日(水)

Dr. Wells の看護会 (accu) の答へたが 東大松尾先生教授の講演、お中も
これに同席された方。

④ 3月1日 (本)

Dr. Wells a 范强金 心 肾 泌尿 2-6 肾 肾 肾

④ 4月3日 內務省-科學會, Dr. Wells (ARCC) の 内務省-科學會.

4月9日 彭长善与Taylor 于4月20日 Duke 工程师 Davison 及 ASBC 成员 Taylor 一起赴 塔拉瓦 会议。毛氏浦上与Taylor 讨论。世界70吨入海中。到外研所来观察。

⑨ (午後从 ABC の車に 新大工町に往き (津早から?) 2人、山崎、泡盛氏等と会う。
5月14日 (月) Dr. Wallenstein に会う。

② 5月21日(月)
 2方 ^{ABCC} 山崎, 辻副店長出席 (梶原, 北村, 林田等と) 共に
 ABCC 岡田内若へ△v.至中.

④ 朝 ABC へ行き 車検 調査表を 運送 月収に 対して 終了し ジョブを
5A 250 (号) 未だ 12 巻 2512 (号) につい たら shaper 系 年 華 の 修理を 2x, 4x の 部 件
検査

② 5月27日(日) 電線の保電器調査表の整理を終わらせた。夜12時迄かかった。
調査表の整理を済ませ、ABC12保電方を依頼した。それ一応打ち切りと
サッパリした。

⑦ 5月28日(月) 9時頃 ABCCの玄関で血圧を測り、調査表を提示、来客センター係員に案内、初回の検査で血圧が正常で経過良好、ABCCで血圧の経過を管理、次回検査は11時頃来館して経過を報告する予定と案内された。

⑨ 6月20日 (7K)

ABEC 会议于 4 月 24 日由 Dr. Wells 与 Dr. Adams 主持并做报告
与 discussion 会议。

1951年

① 1951年 11月 26日 (月)

ABCCの二階に一人か shaefer 邸を移して来た、Dr. 山崎のP x 4万
11時の時(正確には11時) (5月25日のDr. 山崎の日記)

② 昭和26年 12月 23日 陣中から長崎へ移る、

10時と11時のトラックに荷物をつみ、長崎の新居へ移る。
新居へ移るに11時か少し 長崎のタカシと一緒長崎へ行く。

1952年 (昭和27年)

(和泉 - 医師局長
高橋清 - 専任、
北村 - 和泉の助手)

1月 21日 (月)

日中、学術会議会長の手紙。ABCCの長崎高等会議の日中。和泉品
に電信に出席し、費した(この日、高橋、山崎は誰?)

1月 23日 (水)

北村君から ABCC 幹部の協議会(東京)に、その件が決定されたか
和泉品に代理を頼んだ。連絡を話した。了解出来たらしい。

1月 24日 (木)

ABCCの幹部の朝子へ電話をたのふ。何とかしようとのこと (この日、高橋は誰?)
車通一、よくよくとる。

1月 28日 (月)

Dr. Waller に 32品目を贈る。北村君に送る (北村君に送る?)
朝子に 水曜日に行く由、役所を告げる。

2月 22日 (金)

ABCCの小倉君に電話。77トの車。

2月 25日 (月)

朝子へ連絡を朝朝 8時と ABCC から来た Dr. 山崎の件で、
延期となる。

2月 29日 (金)

Dr.
和泉品に、高橋君に Waller 家の 2品目をたのふ Dr. Wright の会。
朝子の手紙に、北村君に送る。北村君に送る。北村君に送る。

1952年(昭和27年)

2月29日(金)

3月18日に東京の国際新聞記者協会会長からロバート Dr. Waller に来函
する由。和文5台回し、ヤルとのこと。

3月5日(水)

報子を通じた ARCC のこと、小井氏の会、統計課の使用に
する。またその器械を見ながら、差支なく陳述した。値は
15,000円とのこと。昨金にサト 540円。

3月10日(月)

報子と東京の ARCC の新紙捲き口所へ

3月12日(水)

午後、ARCC から電話あり、報子の採用決定の由。一冊から来ること。

3月13日(木)

18日の ARCC 主催 東京警察 新聞記者の同会と有る

3月18日(土)

新 ARCC の Waller の訪ね、その日の長崎地方同会等での記者の
会(5時)中機室の新聞会。長崎のガイドに電話。北塔の先生梅田 泉が
白痴病。7時5分、大勢の来客。後2時半まで。

4月11日(金)

ARCC の電話、東京と最初の会を面々に来ようとする。午後来るので 4-5 個所。

4月23日(木)

ARCC の西村女腰痛と受診の来訪 神経痛は 11%。X線もとるが材料。
西村女と東京 ARCC の Dr. Wright の会。何となく淋しそうだった。同会室の
雑誌を借り 報子にやる。

4月25日(金)

午後2時半頃 ARCC の Dr. Wright と Mr. Noble 来り、西村女等の
様子と聞かれ、6時半過ぎに現場を調査した。同会室の
大いな話かたはす。

5月2日(金)

佐佐木君は ARCC と外科医と一緒には出来ずから基礎の研ぎをやる
林君の報告を聞き出す。

1952 (昭和27年)

5月14日(水)

午後 ABCC から西村女が米人女を連れて来た。文献3件。

5月16日(金)

電車で ABCC に行く。同乗者の報告あり。正午 ABCC の食堂で Doctor 室と一緒になる。

5月19日(月)

ABCC との協会の 1130 迎送の車で行く。16/17 年の子供たち、鎖肛、腰直腸瘤があり、*status inversus* があり顔の患者。しゅもろを叫ぶ Tailor さん。
(S さん、H さん、M さん、K さん)

6月25日(水)

Dr. Wright から信託本を贈る。送付。

6月30日(月)

ABCC より先天性梅毒梅毒症を報告して送付。

7月1日(月)

11時 15分 ABCC に付き *stereoscope* を借りた。Dr. Wright から貸した *stereoscope* は送付した。

7月14日(月)

午後 ABCC より L. M. 氏の会合に *stereoscope* を送る。大した用で体ない人類学系に送る。客席は和泉、安中、扇後の会合に送る。

7月31日(木)

3時 30分 ABCC より *geren shaw* (尚紅蓮) と呼ぶ人から来た。和泉君の親戚の会合。知れど、客席の和泉、安中、扇後の会合に送る。大した用で体ない人類学系に送る。客席は和泉、安中、扇後の会合に送る。
sensation をおぼえている。長城の調査を約束す。

8月9日(土)

8時 30分 和泉、安中、扇後の会合に送る。Dr. Wright から信託本を贈る。送付。

8月11日(月)

ABCC より Dr. Wright に報告。和泉、安中、扇後の会合に送る。客席は和泉、安中、扇後の会合に送る。

9月3日(水)

和泉、安中、扇後の会合に送る。Dr. Wright に報告。和泉、安中、扇後の会合に送る。客席は和泉、安中、扇後の会合に送る。

9月7日(日)

12130の法事と関係する Dr. Wright と長崎新聞に欠点。 Mr. Wright
に出版の由

10月18日(土)

ABCC with Dr. Weden の面会。 (僅に調査と意見交換のみ)
(大抵の方向性を定めて協議の進捗)

10月19日(日)

Dr. Weden にやむ報告 (今後調査の方向と表口、口口の) を聞いた。

11月6日(木)

午後4時 12130 ABCC部長新任の Connell 氏に挨拶に来た。和泉部長室に
集り色々の話をした。

11月9日(日)

上野山方面の調査
ABCC での 運動会に見学につき。12時 朝下と共に帰る。

11月10日(

3
1958年(昭和33年)

3月6日—9日 — 産経新聞 かえり ABCC 調査

3月13日(金)

ABCC に付き 産経新聞記者(2件を交換。Dr. Taira に会う)。

15日(日)

ABCC へ 約束の報告と相談に伺った。

19日(木)

ABCC の 懇談会開催 (大抵の方向性 9人集り) (北村、松岡、
村、石井、窪田、工谷、
古川、中野、洞)

4月7日

Dr. Connell 氏。 ABCC へ付き、産経から Moloney, Wood (原稿 提供 要否を問う
エコー Moloney 氏) へ

4月17日(金)

ABCC へ付き 長崎新聞 小沢氏 博石君 Connell
ABCC の 将来の 事について 談話会。

4月18日(土)

和泉部長室へ ABCC の 事について 談話会。

22日(水)

ABCC の 件で、大塚教授連席 評議委員 あり。
会議

23日(木)

ABCC 懇談会 「ABCC の 在り方」 24日 Dr. Connell へ 報告した
強要

30日(木)

ABCC の 環境 sub-committee の 出陣 6 月頃 予定
3月22日

7月1日(水)

和泉部長と ABCC へ付き Dr. Connell - Dr. Weden と 会い、産経新聞
の 報告 関係 6 月頃 予定

あと5L